

東日本大震災は大きな被害をもたらしている。私たち日本を愛している学生たちも自分なりの力で日本の復興を応援したいので、今回の特集を企画した—

私たちは中国人です
我们是中国人，不擅长说日语
私たちの日本語 よくないけど
でも...
日本，加油!!!

日本，頑張れ!
災害の前に，私たちは家族が!
灾难面前，我们就是家人!



日本頑張れ!



Don't Give Up, Japan
March 20, 2011 by Ryo Kubota



THE INDEPENDENT
ON SUNDAY
SINCE 1990 FREE FROM PARTY POLITICAL TIES | FREE FROM PROPRIETORIAL INFLUENCE



東北頑張れ!



Don't give up, Japan
Don't give up, Tohoku
A nation's rallying call

The death toll is at least 1,700, the economy has been hit for billions, and yesterday an explosion at a power plant threatened nuclear meltdown. But now the country is fighting back from its tsunami hell

Art to Support Japan
March 14, 2011 from AoiroStudio
As you may have heard, there has been an 8.9 earthquake and tsunami devastating Japan very badly. The whole world is trying their best to support and help with this terrible disaster. Even the design community has risen to do their part.

TAGS
art
inspiration
Japan
support

広東外大大震災対策本部 迅速に対応

北京時間3月11日13時46分、東日本で大きな地震が起こった。東方学院の先生方は迅速に対応し、当日15時前後には、すでに広東外大大震災対策本部を設置し、一刻も早く一人でも多くの在日留学生の安否を確認するよう全力を尽くしていた。

対策本部長を担当した党委員会書記の敖湘暉先生をはじめ、東方学院院長の陳多友先生、補導員の沈永英先生、学生のごとに最も詳しいクラス委員などが協力し合っていた。その時、日本は地震の影響で通信システムがほとんど壊れたので一時的に連絡がなかなかとれなかった。対策本部のメンバーは打てる手をすべて打ってみた。電話が全然通じない状態なので、インターネットで連絡をとろうとしながら、日本に戻った元広東外大の日本人教師や日本人の友達などにも頼んで、留学生たちの安否を確認してもらった。そして、留学生の安否確認を第一に置いた先生方は自分のことを顧みる余裕はなかった。対策本部長の敖湘暉先生はいつでも最新情報を得るために一晩中携帯を持っていた上、家に帰っても、電話のそばから一歩も離れなかったそうだ。4年生補導員の費俊慧先生は翌日大学院博士課程の入学試験があるにもかかわらず、その時は留学生のことだけに集中していて、最後の一人の安否を確認するまでずっと事務室にい続けた。王琰先生も一晩中国際交流会を通して一生懸命留学生の安否を確認していたそうだ。



午後3時から夜12時まで、対策本部のメンバーはそれぞれ気を

抜かず、連絡に忙しかった。夜9時になると、ほとんどの留学生の安否が確認できた。確認後すぐ留学生の家族にも知らせて、安心してもらうことができた。「その日、対策本部のみんなは本当にずっと緊張

した雰囲気にもまれていた。もし、その時まで連絡が取れない学生がいたら、私たちは徹夜する準備までしていた」と敖湘暉先生は語った。そのたゆまず努力し続ける精神を見て神様さえ感動したのかもしれない。夜11時15分に電話がかかってきた。対策本部のメンバーが電話に出ると、笑顔になった。

それは梁宇熹さんのお父さんからの電話だったからだ。最後の一人も無事だということがわかった。いろいろな困難を乗り越えて、合計31人の留学生の安否を全員確認した後、みんなはやっと気を緩めることができた。

「今度のことに速やかに対応できたのは、お互いに協力し合って積極的に解決法を考え出したみんなのおかげです。みんなの協力し合う力こそが一番重要な役割を果たしたと思います」と部長の敖湘暉先生は感想を問われてこう答えた。



党委員会書記・敖湘暉先生

留学生編

わが校では日本へ留学している学生は少なくありません。今回の大震災で、ほとんど地震体験のない中国人留学生にどのようなことが起こったのか、話を聞きました。



東北大学(宮城県) 大学院生 江偉娜さん

地震に襲われた時、私はルームメイトと冗談交じりにたわいもない話をしていた。突然すごい揺れを感じた。数分間も続いたので、不安でラジオをつけてみて、初めて今回の地

震の深刻さが分かってきた。慌ただしく、二人でマンションから逃げ出した。

マンションを出て、目に入ってきた光景に感動してしまった。向こうにある幼稚園で、先生方が幼児一人一人を背負って、安全な場所に運んでいる。そして、三歳にもならない幼児なのに、冷静に秩序を守ったりお互いに助け合ったりしていた。その瞬間、人間の連帯感や温かさが本当に強く心に刻み込まれた。

地震直後、私は京都へ行った。ところどころで募金が行われ、人々は長い列を作ってお金や物資を寄付している。そのような様子を見ながら、日本にはこの災害を乗り越えることを可能にする「人間の連帯」が存在していると思った。

人間の連帯感に 感動

日本の現場からの声



城西国際大学(千葉県) 留学生 周雲さん

地震が起こったとき、私は一人で家でご飯を作っていた。強烈な揺れを感じた。突然電気やガスも止まったし、携帯も通じなく

なった。人生で初めてあんなに強い地震を感じたので、本当に怖くて、びくびくしながらクラスメートの家に行った。

苦しいときの友こそ真の友だ。その時、次々と届いた心配のメッセージを見て、思わず涙を流した。私のことを心にかけて、応援してくれて、本当にありがとう。

余震の後、土地の人が教えてくれたおかげで、避難所に着いた。優しいサービスやタイムリーな情報など、素晴らしいと思った。自然災害に対する経験が豊富なためか、私は怖がっていたのに対して、日本人はすごく冷静で、パニックに陥る人は誰もいない。これは教育の結果で、私たちが学ぶべきことだと思う。

非常時でも冷静さを

地震に対する姿に

感銘

地震が起こった時、私はちょうど文章を書こうとしていたところだった。普段より揺れの続く時間が長かったので、ちょっと心配になりテレビをつけた。すべてのチャンネルは緊急番組になっており、今回の地震の大変さが分かってきた。でも札幌には大きな影響は及ばなかったので、いまも人々の生活はいつも通り続いている。

テレビを見ていた時、メディアはどんな厳しい状況に対しても落ち着いているという気がした。冷静に、客観的にニュースを放送し、余計な説明などは一切使わないで、事実を簡潔に伝える。民衆も政府の指示を信じて、自分のできるだけのことを尽くす。みんなが精一杯に眼前の苦難を乗り越えるように努力していて、支援も復旧も冷静かつ迅速に進んでいる。もし中国でこのようなひどい災害に遭ったら、私たちはどんな姿勢で対応できるだろうか。最近私はずっとこのことを考えている。

札幌大学(北海道) 留学生 舒亦庭さん

